

【祈祷会奨励】「ナオミによって信仰に招かれるルツ」 ルツ1章、ウ信仰告白14:2 (6/1)

前書の士師記は、全体が、イスラエルの罪と腐敗に満ちた状態にあり、特にサムソン後の17章以降は、非常にドロドロとした状況が語られていました。この次に語られているのがルツ記です。多くの方は、ミレーの描いた「落穂拾い」の絵を直ぐに思い描くことができるかと思います。そして人情物語と理解している人も多いかと思います。しかしルツ記の時代は、士師が世を治めていたころ(1:1)、イスラエルが罪と腐敗に満ちていた時代です。

物語は、「飢饉が国を襲ったので、ある人が妻と二人の息子を連れて、ユダのベツレヘムからモアブの野に移り住んだ」ことから始まります(1)。信仰者であるナオミと主人エリメレク、その子どもたちマフロン・キルヨンも、イスラエルの嗣業の地を離れ、モアブの野に移り住んだということは、非常に決断が迫られたことかと思えます。

イスラエル全体が、罪と汚れに満ちていたことを士師記より確認できるわけですが、それでもなお主なる神によって与えられた嗣業の地を離れるということは、勇気のいる行動であったと考えられます。生きるための最終的な手段であったのか、それとも、夫のエリメレクが、それほどの信仰を持っておらず、嗣業の地に執着がなかったために行えた行動であったのか、判断することはできません。いずれにしても、信仰者であったナオミにとってモアブへの移住は、心の痛い出来事であったはずで

きてナオミは、夫のエリメレクに先立たれ、二人の息子マフロン・キルヨンも、それぞれの嫁であるオルパとルツを遺し、先立ちます。残ったのは、ナオミとモアブ人の嫁であるオルパとルツだけです(4)。ここからルツ記の本論が始まります。

ナオミを始めとする3名の女性は、今後のことを考えなければなりません。現代のように、女性に仕事があり、暮らしていける時代ではありません。このとき、ナオミは二つの決断をくだします。一つはナオミがモアブの野を去って国に帰ることにしたことです(6)。ここでは二人の嫁も従ったように語られていますが、ナオミ二つ目の決断をくだします。二人の嫁を、自分の里に帰すことです(8)。ナオミは、3人がそれぞれ生きる道を探った結果です。若い嫁であるオルパとルツは、再婚することにより新しい生活を探る道があります。そのためには、自分の里であるモアブにいた方が良いのです。一方ナオミは、二人の足を引っ張りたくないとの思いがあります。そして、自分が故郷であるユダに帰ることにより、血縁の者を訪ね、なんとか生き延びることができると思ったのです。ここには、ナオミの二人の嫁に対する愛が示されています。

このとき、「二人はまた声をあげて泣いた。オルパはやがて、しゅうとめに別れの口づけをしたが、ルツはすがりついて離れ」ませんでした(14)。そして、ルツはナオミに語ります(16-17)。普通に読めば、嫁と姑の愛情物語です。しかし、ここで私たちが忘れてはならないことは、ナオミはユダ出身のイスラエル、ルツはモアブ出身の異邦人であり、偶像崇拝者でした。そしてルツが、「あなたの神はわたしの神」「主よ、どうかわたしを幾重にも罰してください」と語るとき、ルツはナオミの信じているイスラエルの神、主なる神を受け入れ、主による救い、主による裁きを受け入れていることを意味しています。

ルツ記は物語の最後で、ルツと結婚したボアズからダビデ王が誕生したことを記します。つまり旧約はイスラエルであり、新約で全世界に福音が伝えられたという紋切り型の理解をしてはなりません。旧約においても、主なる神は、異邦人であるルツを覚え、救い、ダビデ王の系図、キリストの系図の中に記してくださいました(マタイ1:5)。ルツはまさに、ナオミの信仰を受け継ぎ、主を信じる信仰に導かれ、主はルツに祝福をお与えくださいました。従ってナオミは、モアブ移住が失敗であり、神に責任を問いますが(20-21)、ルツが信仰に導かれ、神の民に組み入れられるために、主によって用いられたのです。

日本に生きる多くの人たちも、キリスト教は外国の宗教であり、自分たちに関係ないとの立場に立っています。しかし、その中でも主なる神は救いへとお招きくださる方を準備して下さり、教会へとお招きくださいます。主を信じ、信仰を告白する者としてくださいます。私たちがそうであったように、まだ多くの神の民が主によって召命を受け、教会に招かれる時を待っています。彼ら一人ひとりに聖霊が働き、教会へと招かれ、主を信じることができるように、私たちは覚え、信じて祈り続けることが求められています。

【祈祷会奨励】「神の愛に基づく隣人への愛」 ルツ 2 章、ウ信仰告白26:1 (6/8)

ルツ記は、時代は士師が世を治めていた頃、言い換えますと、イスラエルの民が腐敗していた頃の話です(1:1)。しかし今日の御言葉は、オアシスと呼ばれるのにふさわしい、隣人愛に満ちた落ち穂拾いの場面が語られています。

ナオミとモアブ人の嫁ルツは、イスラエルのベツレヘムに戻ってきました。現実を考えると、女性二人が暮らしていくためには、困難が待ち受けていました。人々からの憐れみを受けなければ、生きていくことはできません。

ルツは落ち穂を拾わせて頂くことにより今日の食料を得ようとします(2)。主なる神は、収穫後の落ち穂を貧しい人、寄留者、孤児、寡婦のために残しておくことを命じています(レビ19:9-10、申命記24:19)。貧しい者は、この落ち穂を拾って生きることを、主は願っておられます。そしてここに寄留者も加えられています。ここには、イスラエル人も異邦人も関係ありません。主がお与えくださった嗣業の地に寄留する者であるならば、誰でも、こうした方法で、食料を得るように、主は教えてくださっています。ナオミとルツは、生きていくために落ち穂を拾わせて頂くことを願い、ルツは率先して落ち穂を拾いに行きます。

ルツが落ち穂を拾いに行ったのは、エリメレク一族のボアズが所有する畑地でした(3)。ボアズは、モアブの女ルツが落ち穂を拾っていることを確認した上で(6)、ルツに対して落ち穂を拾うことをゆるし、さらに水を飲むことも許可してくださいました(8-9)。

主によって落ち穂拾いのことが規定されていましたが、イスラエルは罪に満ちていた時代です。律法の規定に従わず多くの人々が生きています中、ボアズは違いました。主なる神を信じ、また彼自身が律法に示された隣人への愛に生きていたことを御言葉は語ります。

神を信じ、神の律法に生きる、十戒に従って生きると語る時、十戒において語られているから、それを守ればよいというものではありません。こういうことを行っていると、律法主義になります。そして、「律法を守れば救われ、守らなければ裁かれる」と解釈してしまいます。しかし真に神を信じ、神の救いに感謝し、神の愛に生きるとき、同じ律法が語られても、守り方は異なります。つまり「守らなければならない」との思いで、律法を守るのではなく、主なる神による救い・恵みに感謝しつつ、喜びをもって律法に仕えます。そして、このときに示される隣人に寄り添って生きることとなります。

ボアズはルツのことを知り、そしてその苦しみに寄り添い、そして自ら与えられた恵みを分かち合うように、そしてルツの必要が満たされるように施しを行います(11-12)。これこそが、神の愛に満たされたところから生じる隣人愛に基づく行動であり、聖徒の交わりです。ウエストミンスター信仰告白 第26章 聖徒の交わりについて「1. 自分たちの頭であるイエス・キリストに、かれの霊により、信仰によって、結ばれているすべての聖徒たちは、イエス・キリストの、恵みの賜物・苦難・死・復活・栄光において、かれとの交流をもつ。また、聖徒たちは、愛において互いに結ばれているので、互いの〔一般的な〕賜物と恵みの賜物にあずかる交わりをもっており、内なる人においても外なる人においても〔内的にも外的にも〕相互の益となるような、公的、私的な義務を果たさなければならない」。

このようにしてルツは、一日ボアズの畑で落ち穂を拾うことが許され、さらに多くの恵みに満たされました。そしてナオミの所に戻り、報告します(19)。このとき、ナオミは主なる神を誉め称えつつ、ボアズに祝福を祈ります(20)。「どうか、ナオミ(快い)などと呼ばないで、マラ(苦い)と呼んでください。全能者がわたしをひどい目に遭わせたのです」

(1:20-21)と語っていたナオミが、生きています人にも死んだ人にも慈しみを惜しまれない主の存在を受け入れ、主を誉め称えています。主なる神は、生きて働かれ、常にナオミと共にいてくださいました。主はナオミをひどい目に遭わせるために、モアブの地に行かせたのではなく、モアブの女ルツを神の救い・神の御計画に入れるために、ナオミを用いられました。イスラエル全体が乱れていた時代にあっても、主なる神は、主を信じる者と共にいてくださり、恵みと祝福を満たしてくださいます。

今に生きる私たちにも、時になぜ、このような試練・苦しみ・悲しみに遭うのかということが繰り返されます。しかし、ここにも主なる神の大いなる愛が込められ、今に生きる私たちに神の祝福が示されるための準備です。

ナオミとルツは、モアブからイスラエルの町ベツレヘムに来て、そして縁続きの人ボアズと出会うことにより、当面、二人が暮らしていくことができることとなりました。しかし、二人に与えられた生活は、ボアズの善意において与えられたのであり、その日暮らしの生活であることには変わりなく、安定した生活が保障されるものではありません。

そうした中、ナオミは嫁のルツに対して、一つの提案を行います(1)。ナオミは、ルツが幸せに落ち着いて生きることを考えます。それがボアズに結婚を迫るのです。

2~4節は、結婚の意思を表現する行為です。なんだか怪しい行為のようにも思います。聖書が語るからといって、現代においても同じ行為が許されるかと言えば、決して許される行為ではありません。私たちは時代的背景、状況を確認して聖書を読み、現代の状況に合わせて行動しなければなりません。またこうした求婚は、聖書の他の箇所にもなく、またナオミがルツに教えていることからして、当時のイスラエルにおいて行われていた行為であり、モアブでは行われていなかったことかと思われています。

その後のことは、ボアズに責任であり、「主なる神に委ねなさい」と語っています(4)。

このことに対して、ルツは、「言われるとおりにいたします」と答え、ナオミを信頼し、そしてその背後にある主なる神にすべてを委ねて、行動に移します。つまり信仰とは、主なる神を信じ、主にすべてを委ねるわけですが、ただ主をお願いするだけではなく、信じて行動することが伴います。主なる神が祈りに答えをお与えくださり、誤っていけば主が修正してくださる確信をもって行動することです。

このことに対するボアズの応答を、私たちは顧みなければなりません。自分が寝ている所に、女性が足もとに寝ているということは、驚くべきことです。誘惑と受け取ることもできます。無礼なことが行われているとして、処罰することもできます。この時ボアズは、すぐに反応するのではなく、ルツに問いかけ、何が起きているのか確認します(9)。

そしてボアズは、ルツの行為の意味を理解し、信仰的に対処します(10-11)。ボアズはルツの行為を「真心」と語ります。「親切」(口語訳)、「真実・誠実」(新改訳)と訳されてきた言葉です。ルツが若さ故に、金持ちやルックスにおいて判断して、追いかけるようなことをせず、当時のイスラエルのしきたりに従った方法で、結婚を願い出たことに対して、ボアズはルツの真心・信仰と受け止めます。その上でボアズは、自分の感情において行動するのではなく、神の民として、秩序・順序を確認した上で、行動に移します(11-13)。

それだけではありません。ボアズは、ここにルツが来たことに対して、今後、不審に思われたりすることがないように対応します。さらに、ボアズは、ナオミとルツの家のことを思いやり、大麦を6杯を量ってルツに背負わせて持ち帰らせます(15)。私たちは、一つの出来事が起こると、それだけに集中してしまい、他のことを考えることができなくなります。しかしこのときボアズは、この状況を周囲の人たちがどのように見るか、そしてルツとナオミの家族のことまで配慮して、行動します。私たちが主なる神を信じて生きるとは、今、主なる神の民として物事を判断し、生きることが求められるのですが、同時に、空間的・時間的な視野を広くしなければなりません。

ボアズが、周囲の人たちの反応、ナオミのことまで配慮したのは、空間的な視野の広さを物語っています。12~13節のボアズの言葉は、ボアズが、主イエスの系図に組み込まれることまで理解していたわけではありませんが、恵みの契約という大きな神の恵みの中、今、神の民として生かされているということを受け入れ、行動した結果と言うことができるかと思えます。これが、ボアズの持っている時間的な視野の広さです。

今日のルツ記3章を読むと、ラブ・ストーリーとして読みがちですが、ナオミ、ルツ、そしてボアズが、それぞれ、感情的に行動することなく、自分たちの生活において、主なる神が何を成し遂げようとしているのかを信仰的に受け止め、節度ある行動を行っています。このことを私たちは理解しなければなりません。

信仰とは、ただ信じれば良い、後は神さまにお任せではいけません。主を信じ、主に委ねて祈り、その上で行動することが求められます(ウェストミンスター信仰告白14:2)。すべてをご存じである主は、主の救いに必要をすべて満たしてください。

【祈祷会奨励】「買い取りの責任を果たすボアズ」ルツ4章、ウ信仰告白3:6 (6/22)

ルツ記を学んできました。特に3章においては、ルツの行動に対して、批判が生じるような個所でありましたが、当時のイスラエルにおいて行われていたことであり、そのことに注目するのではなく、信仰に基づいてナオミが命令し、信仰に基づいてルツが行動し、信仰に基づいてボアズが応答したことを確認してきました。そしてボアズは、ルツの行為に対して、「明日の朝その人が責任を果たすというのならそうさせよう。しかし、それを好まないなら、主は生きておられる。わたしが責任を果たします」と語ります(3:13)。

つまりボアズは、ナオミの嫁であるルツに、親戚としての責任を果たすことを約束しました。そして翌朝のことが4章に記されています。「町の門」は、審判と法の執行の場所を意味しており、「門」は町の政治と生活にとって中心的な役割を果たしていました。そしてボアズが長老のうちから10人を選び、これからのことの証人となって頂きます(2)。

つまりボアズが行おうとしていることは、最終的にはルツと結婚することですが、それに先立ち、ルツの姑ナオミの財産の相続を取り扱います。つまり、土地を相続することにより、ナオミの夫エリメレクの嗣業の地を絶やすことなく相続することを求めるのですが、ボアズはそればかりか、エリメレクにつながる血縁としてのナオミの嫁ルツとの結婚も求めます(4-6)。

この親戚の人は、ルツのことまでは責任が持てないとして、断ります。聖書は語りませんが、この親戚の人にとって、ルツがモアブの女・異邦人であることがネックであったことは確かなことでしょう。

しかし、次に権利のあるボアズは、それを受け入れ、そして契約の手続きを行います。まさに最初に10人の長老たちに証人となっていただき、契約を結びます。このときの契約は、相続を放棄する者が履き物を脱ぎ、ボアズがそれを受け、宣誓します(8)。「ボアズはそこで、長老とすべての民に言った。『あなたがたは、今日、わたしがエリメレクとキルヨンとマフロンの遺産をことごとくナオミの手から買い取ったことの証人になったのです。また、わたしはマフロンの妻であったモアブの婦人ルツも引き取って妻とします。故人の名をその嗣業の土地に再興するため、また故人の名が一族や郷里の門から絶えてしまわないためです。あなたがたは、今日、このことの証人になったのです』」(9-10)。

ここまでルツ記4章を読んできて、「責任」という言葉が比較的繰り返されてきたかと思えます。しかし新改訳聖書を読むとまったく違います。「買い取る」「買い戻しの権利」、「買い戻す」、「買い取る」という言葉が、繰り返されます(特に4:4~6)。

この「買い戻す」と新改訳が訳す言葉は、「贖い」という言葉です。つまり、ここでエリメレクの所有の土地を買い戻すことが契約の取りかかりとなりましたが、モアブの地に逃れ、嗣業の地を受け継ぐ者がいなかった土地を買い戻し、嗣業を受け継ぐことでした。それと同時に、アブラハムの甥ロトの子孫であるモアブ人(創世記19:37)が贖われ、神の民として買い取られたのです。

このとき、ボアズは証人である長老たちとすべての民に対して語ります(11-12)。ここでボアズは、ラケルとレアに言及します。彼女らは、アブラハムの兄弟ナホルの子孫であり、イスラエルにとっては、モアブと同じ距離の遠縁にあたります。主なる神は、このラケルとレア、そして彼女たちの側女を用いて、イスラエルを起し、そして神の民として召してくださいました。

贖う、買い戻すとは、異邦の民となり、滅びの内に歩んでいた者を、無条件に神の民として迎え入れ、家族にしてくださいということ。そういうことでは、ルツは、モアブの女でしたが、イスラエルの内に迎え入れられ、そればかりか、主の祝福に満たされました。この喜びをナオミは告白します(14-15)。

ルツが、ボアズにより買い取られ、神の民、主の祝福に入れられたように、私たち一人ひとりも、日本に生きる異邦人でしたが、主の憐れみにより教会へと集められ、主イエス・キリストを救い主として信じ、神の救いへと入れられました(参照:ウエストミンスター信仰告白3:6)。私たちは、ここに働く主の御業を受け入れ、主を信じて歩み続けることが求められています。